

1801年(享和元年)に発生した鳥海山の火山泥流

秋田大学教育文化学部* 林信太郎

Volcanic mud flow of Chokai-san which occurred in 1801 (Kyowa gannen)

Shintaro Hayashi

College of Education and Human Sciences, Akita University, 1-1 Tegata Gakuen-machi, Akita City, 010-8502, Japan

本研究では、1801(享和元年)8月に鳥海山で発生した火山泥流について、『鳥海山炎燈』に基づいて記述する。火山泥流とは、火山の噴火で発生した水と火山灰などが混合した流れで、融雪や火口湖の決壊など様々な成因がある。

1. 使用した史料の性格

本研究で引用した『鳥海山炎燈(享和元年)』は、『象潟郷土誌資料第七巻(復刊)』の中に「鳥海山噴火記録」の一部として収録されている。『鳥海山炎燈(享和元年)』は、斎藤善之助氏所蔵と象潟郷土誌資料には記されてある。斎藤善之助氏がどのような人物かは不明である。史料中の鳥海山上の仮殿設営をめぐる記述内容から、筆者は鳥海山北部の村(現在のかほ市)に在住していたらしいことがわかる。史料のはじめと最後の部分は、『象潟郷土誌資料第七巻(復刊)』では略されているが、少なくとも享和元年二月十三日から七月五日のまでの噴火および噴火をめぐるできごとについて記録されている。

伝聞によって書かれたと判断される部分もあるが、鳥海山の登山に関する部分や火山泥流の部分の記述は詳細でかつ具体的である。

また、噴火のため山頂付近にあった神社を、外輪山である行者嶽に移動した件などは、飽海郡(現在の山形県側)の史料である『文化大地震附鳥海山噴火由来』とも符合している。

以上の点から本史料は信頼性が高いと判断した。

2. 火山泥流発生の様相

火山泥流の発生した享和元年(1801年)七月五日は、鳥海山1800-1804年噴火のクライマックスの直前の時期である。林ほか(2013)は、この噴火における水蒸気爆発からブルカノ式噴火への移行は、七月二日と十日の間のいずれかの時点とした。また、寺田村西小出東小出は現在のかほ市の小出、寺田地区

に相当する。鳥海山の山頂から北北西方向約18km地点に位置する。山頂に源を持つ白雪川沿いにあり、泥流が流下した場合はその経路になる。

七月五日は朝「少しの雨」しか降らなかったが、泥流が発生した。「大洪水一さんにみなぎり田畑秣野一面水となり石は浮いて流れ大木は長木の如くに流れる有様也」とある。大洪水とは記されているが、石や大木が流されている所から火山泥流と判断できる。しかも、「寺田村四軒」では家の中にまで泥が流れ込み「五尺斗りの厚さ也」と分厚く泥がたまった。「田畑は泥の下になり百反歩程はいたみたり」とある。1反はおよそ992平方メートルであるから、約10万平方メートルの範囲が泥に埋もれたことになる。埋もれた田畑の位置は、寺田南部の低地の可能性が高い。

また、火山泥流はさらに白雪川を流れ下り、白雪川河口の芹田や三森に大量の泥や大石、大木を堆積させ、渡し船の通行が妨げられ、入り江も埋まって船の出入りが難しくなった。しかも、白雪川河口には「二間四角」の大石が現れた。

参考：鳥海山炎燈(抜粋)

「七月五日朝少しの雨にて川向など秣場に寺田村西小出東小出皆馬を引き秣場へ行きけり思ひもよらず大洪水一さんにみなぎり田畑秣野一面水となり石は浮いて流れ大木は長木の如くに流れる有様也其時寺田村四軒は家の中に泥流れ込み五尺斗りの厚さ也水ひけ候所かたまりて鋤も立たぬ程なりしと、田畑は泥の下になり百反歩程はいたみたり然るに其川端に馴れし故にやけがはなかりけり、尚ほ深山の大石大木海口にふさかり芹田の渡し止りければ板橋にすると也、海口三里四方泥に埋み船の往来難成と也、三森の入澗埋りて船の出入止む芹田磯辺は大石多く泥と埋み蛇も泥の下に成る、不思議やな海口に鳥海山の石と同じき大石二間四角程と見へたり(以下略)」

* 〒018-8502 秋田県秋田市手形学園町 1-1
電子メール: hayashi@ed.akita-u.ac.jp